TOKYO BAPTIST CHURCH 東京バプテスト教会
Weekend Message
週末メッセージが聞けます http://tokyobaptist.org/sermons/

イエスの7つの「私は…である」　私は復活であり、命である

ヨハネによる福音書 11 章 25-26 節

2026 年 7 月 4 日 & 5 日
神永 譲（ジョエル） 牧師

はじめに

TBC 渋谷キャンパスの皆さま、そしてスババプテスト教会、トンガバプテスト教会、TBC 三郷、TBC ウエストトウキョウの兄弟姉妹ならびにご友人の皆さまにご挨拶申し上げます。

ベネズエラ地震支援について

ご存じの方もおられるように、6 月 24 日、ベネズエラで大規模な地震が発生し、1,700 名以上が亡くなり、12,000 名が避難を余儀なくされ、現在も行方不明者の確認作業が続けられています。教会として、今回の地震で被害を受けた方々を支援するため、日本・世界宣教献金より 40 万円を、南部バプテストの災害支援機関 Send Relief を通して送ります。この献金は、私たちが捧げるものが宣教の働きに用いられる一つの具体的な方法です。

祈りましょう。

今週末の焦点は、ヨハネの福音書に記されているイエスの 7 つの「私は～である」という宣言です。このシリーズもすでに 5 回目のメッセージに入りました。そして、私が説教する機会をいただくときには、毎回このテーマを取り上げ、「私は～である」を一つずつ掘り下げていきます。今回のメッセージでは、イエスが語られた「私は復活であり、命である」という宣言を取り上げます。

イエスはこう言われました：

1. 「私は命のパンである。」（ヨハネ 6:35）
   — 2025 年 12 月 27･28 日
2. 「私は世の光である。」（ヨハネ 8:12）
   — 2026 年 1 月 31 日･2 月 1 日
3. 「私は門である。」（ヨハネ 10:9 NIV）
   — 2026 年 2 月 21･22 日
4. 「私は良い羊飼いである。」（ヨハネ 10:11）
   — 2026 年 5 月 2･3 日
5. 「私は復活であり、命である。」（ヨハネ 11:25–26） — 本日のメッセージ
6. 「私は道であり、真理であり、命である。」（ヨハネ 14:6）
7. 「私はぶどうの木である。」（ヨハネ 15:5）

私は～である（I AM）の簡単な背景

「私は～である」という言葉は、ギリシャ語の「ego eimi」をそのまま訳したものです。神は、旧約聖書・出エジプト記 3 章 13～15 節において、ご自身の名「I AM（私はある）」をはっきりと啓示されました。それは、モーセを召してイスラエルの民を奴隷の苦しみから救い出し、彼らをエジプトから導き出される際の出来事です。イエスが新約聖書の中で同じ名『I AM（私はある）』をご自身に用いられたとき、それは文字どおり、そして実際に、ご自身を神と等しい者とし、ご自身こそ神であると宣言しておられるのです。イエスは、旧約の時代に『I AM』と名乗られた神ご自身が、今ここにおられ、あなたに語っているのだと明確に宣言しておられるのです。

ヨハネの福音書 11 章 1～44 節の出来事を見ていきましょう。まず、この記述を節ごとに見ていき、そこからいくつかの示唆を見ていきます。

マルタとマリアがイエスに知らせを送る（ヨハネ 11:1–3）
「[1] ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロと言った。[2] このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足を拭った女である。その兄弟ラザロが病気であった。[3] 姉妹たちはイエスのもとに人をやって、『主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです』と言わせた。」

ここには、一人の男が病気になっているという状況があります。その名はラザロ。イエスが愛しておられる者です。「ラザロ」という名前は、「神は私の助け主」という意味です。では、彼の姉妹たちはどうしたのでしょうか。彼女たちは兄弟のために助けを求めています。姉妹たちは、救急車を呼ぶのではなく、（何らかの使いを通して）イエスに兄弟のことを知らせました。「主よ、あなたが愛しておられる者が病気です」と伝えたのです。興味深いことに、彼女たちは「私たちの兄弟ラザロが病気です」とは言っていません。

ラザロの病の知らせを受けたイエスが、あえて訪問を遅らせる決断をされる（ヨハネ 11:4–7）「[4] イエスは、それを聞いて言われた。『この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。』 [5] イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。[6] ラザロが病気だと聞いてから、なお二日間同じ所に滞在された。[7] それから、弟子たちに言われた。『もう一度、ユダヤに行こう。』」

ここで、私たちは「病」に込められた救いの目的を見ることができます。イエスはこう言われます。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」病の詳細は記されていませんが、ラザロの病は非常に深刻で、姉妹たちがイエスに助けを求めるほどのものでした。それにもかかわらず、イエスはすぐに出発されず、ヨルダン川の向こう側で二日間とどまられた後、ベタニアへ向かわれました。

イエスは弟子たちに、ご自身が「世の光」であることを思い起こさせる（ヨハネ 11:8–10）「[8] 弟子たちは言った。『先生、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。』 [9] イエスはお答えになった。『昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまずくことはない。この世の光を見ているからだ。[10] しかし、夜歩けば、つまずく。その人の内に光がないからである。』」

弟子たちは、主イエスの身の安全を心配していました。というのも、少し前に「神殿奉献記念祭」でエルサレムにおられたとき、ユダヤ人たちがイエスを石で打ち殺そうとしたからです。

イエス様、本気ですか。死ぬつもりなのですか。見てください、同じユダヤ人たちは、あなたが神の子であり、父と一つであると語られることに強く反発しているのです。しかしイエスは、弟子たちの問いに対して、逆に問いをもって答え、一日には定められた時間があることを思い起こさせます。より深い意味において、イエスはこの出来事を通して、ご自身こそ『世の光』であると弟子たちに再び示されます(ヨハネ 8 章 12 節)。D.A.カーソンは次のように記しています。「弟子たちは、イエスと共にいる“昼の十二時間”のあいだ、主から委ねられた務めを果たさなければならない。しかし、間もなくイエスが去られるという暗闇の時が訪れ、その務めを行うことができなくなるのである。」(D.A.カーソン著『The Gospel According to John』409 頁)

イエスはラザロが死んだことを知っておられる(ヨハネ 11:11–16)「[11] こうお話しになり、また、その後で言われた。『私たちの友ラザロが眠っている。しかし、私は彼を起こしに行く。』[12] 弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。[13] イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。[14] そこでイエスは、はっきりと言われた。『ラザロは死んだのだ。[15] 私がその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。』[16] すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、『私たちも行って、一緒に死のうではないか』と言った。」

イエスはラザロが死んだことを知っておられましたが、弟子たちは彼がただ眠っているだけだと思っていました。 そこでイエスは、ラザロが実際には死んでいることを彼らに明らかにされます。イエスには、弟子たちには分からないことを知る力があるのです。この違いが、イエスを弟子たちと区別します。 イエスは、ラザロが命を失った場所に自分がいなかったことを喜ばれました。まもなく、弟子たちは主のもう一つのご性質を目の当たりにすることになります。トマスは「私たちも彼と共に死のう」と言ったとき、自分が何を言っているか理解していなかったのでしょう。先の D.A. カーソンは次のようにしています。「神の子羊としてイエスが負われた死(1:29, 36)は、弟子たちが共に担うことのできる性質のものではなかったのです。」(D.A.カーソン著『The Gospel According to John』410 頁)

イエスは、ラザロがすでに四日間葬られていることを知る(ヨハネ 11:17–19)「[17] さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた。[18] ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。19 大勢のユダヤ人が、兄弟ラザロのことでマルタとマリアを慰めようとして来ていた。」

イエスと弟子たちがベタニアに着いたとき、ラザロはすでに死んだまま四日たっていました。ユダヤ人の葬儀の慣習では、死者はその日のうちに葬られるのです。世界各地の文化と同様に、一世紀のユダヤ社会においても、嘆きはしばしば大きな叫びや泣き声によって表され、共同体の中で共に悲しみを分かち合う形で行われました。嘆く人々は自分たちで泣き叫ぶだけでなく、泣き声と涙を絶えず続けるために泣き手のプロを雇いました。最も貧しい家族でさえ、少なくとも笛吹き二人と、泣き叫ぶ女性を一人雇うのが慣習でした。ラザロの家は裕福であり、いったい何人のユダヤ人が 泣き手として雇われていたのか分かりません。(D.A.カーソン, https://www.crossway.org/articles/the-outrage-of-jesus/ 〔一部改変〕)

マルタはイエスに会い、悲しみと同時にイエスへの信仰を告白する(ヨハネ 11:20–22)「[20] マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家で座っていた。[21] マルタはイエスに言った。『主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。[22] しかし、あなたが神にお願いすることは何でも、神はかなえてくださると、私は今でも承知しています。』」

嘆き悲しむ中、マルタとマリアの二人の姉妹は、イエスが来られると聞きます。 するとマルタはすぐに家を出てイエスのもとへ向かいます。しかしマリアは家にとどまることを選びました。マルタはイエスに、「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」と言います。つまり彼女は、「私たちが知らせを送ったとき、なぜすぐに来てくださらなかったのですか。なぜ旅を遅らせたのですか」とイエスに訴えているのです。

その後、その後、彼女は大胆に自分の信仰を告白します。「しかし、あなたが神にお願いすることは何でも、神はかなえてくださると、私は今でも承知しています。」(ヨハネ 11:22)。兄を死によって失ったにもかかわらず、彼女は主への信仰を失いませんでした。

イエスはマルタに、兄が再び命を得ることを確信させる(ヨハネ 11:23–24)「[23] イエスが、『あなたの兄弟は復活する』と言われると、[24] マルタは、『終わりの日の復活の時に復活することは存じています」と言った。」

イエスが考えておられたのは、まさにすぐ起こる「ごく近い未来」でした。しかしマルタが思い描いていたのは、終わりの日に起こる「はるか遠い未来」 死者の復活のことでした。 どちらも未来を指していますが、一方はほとんど即座に起こることであり、もう一方は遠い将来の出来事なのです。

イエスは「私は復活であり、命である」というご自身の宣言を明らかにする(ヨハネ 11:25–27)「[25] イエスは言われた。『私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。[26] 生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」[27] マルタは言った。『はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じています。」」

そこでイエスはマルタに示されます。「あなたと共にいる“私”こそ、復活であり、命なのだ」と。 つまり、イエスはこう言っておられるのです。「私がいるところには、命がある。 私が今ここにいるゆえに、ラザロは再び生きるのだ。」

「私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。」この二つの言葉でイエスが意味しておられるのは何でしょうか。ジェームズ・M・ボイスによると、イ

エスのこの言葉を理解する基本的な方法は三つあります(ジェームズ・M・ボイス著『The Gospel of John』Vol. 3)。私はそれらを、純粋に霊的な視点、肉体と霊による視点、そして純粋に肉体的な視点と名づけました。

純粋に霊的な視点:「私を信じる者は、霊的には死んでいたとしても、霊的な命を得る。また、霊的に生きて、なお信じ続ける者は、霊的に死ぬことは決してない」(852頁)。

肉体と霊による視点:「私を信じる者は、肉体的には死んでも、終末の時に肉体の復活を経験する。また、霊的に生きて、私を信じる者は、霊的に死ぬことは決してない」(852頁)。

純粋に肉体的な視点:「私を信じる者は、私の再臨の時点で肉体的に死んでいても、復活させられる。また、再臨の時に生きていて信じている者は、肉体の死を経験することなく、天へと引き上げられる」(853頁)。

これら三つの見方は、それぞれにおいて正しいと言えます。しかし、この箇所の文脈を考えると、私は第二の肉体と霊による視点を支持します。ここには、現在だけでなく将来においても、肉体的・霊的な命の約束が示されているからです。

イエスはマルタに、「あなたはこれを信じるか」と尋ねられます。マルタは肯定して答え、さらにこう告白します。「私は、あなたがこの世に来られるメシア、神の子であると信じています。」

マリアは悲しみの中でイエスのもとへ走り寄り、イエスは深く心を動かされる(ヨハネ 11:28–37) ヨハネ11章28～37節によれば、マリアはイエスがベタニアに来られたと知らされます。悲嘆の中にあった彼女は、急ぎイエスのもとへ向かいます。イエスは、涙するマリアと共にいたユダヤ人たちの嘆きをご覧になり、深く心を痛め、涙を流されました。

イエスは父に感謝をささげた後、ラザロを墓からよみがえらせる(ヨハネ 11:38–44)
ヨハネ11章38～44節で、イエスはラザロが葬られている墓に到着されます。それは洞穴で、入口には石が置かれていました。イエスは、墓をふさいでいる石を取り除くようお命じになります。ところがマルタは、兄が死後四日を経ているため、すでに臭いがしているのではないかと案じます。

古代ユダヤ人の信仰によれば、死者の霊は四日間その墓の近くにとどまり、再び肉体に戻ろうとするのだと考えられていました。しかし四日目になると、遺体の顔が判別できないほどに腐敗してしまうため、霊はついに完全に去ってしまうと考えられていました。(ウィリアム・バークレー著『The Gospel of John, Vol. 2』99頁)

また、ある文献によれば、人が死んだとき、体の細胞は同時に死ぬわけではありません。まず、脳細胞や神経細胞が数分以内に死にます。数時間後には皮膚細胞が機能を停止します。一部の白血球や筋肉細胞は、死後四日ほどまで遺伝子活動が検出されることがあります。

イエスはマルタに、先ほどの会話を思い起こさせます。**「もし信じるなら、神の栄光を見ると言ったではないか」(ヨハネ 11:40)**。イエスは祈られた後語った。**「父よ、私の願いを聞き入れてくださって感謝します。私の願いをいつも聞いてくださることを、私は知っています。しかし、私がこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたが私をお遣わしになったことを、彼らが信じるようになるためです。」(ヨハネ 11:41b–42)**。その後、イエスはラザロを墓から呼び出し、彼を奇跡的に死からよみがえらせました。そして、群衆に彼を巻いていた布をほどくよう命じられました。

福音書は、完全に死んでしまった人を描いているのです！　同時に、福音書はその「完全に死んだ人」を再び生き返らせることのできる方をも示しています。その方こそ、神の子であり、「私はある(I Am)」と言われる「復活と命」であるイエスです。

重要なポイント

1. イエスこそ“命の創造者”です。あなたの命も、私の命も、主から与えられたものです。ゆえに、主は私たちの命を完全に支配する権威を持っておられます。しかし主は、死に対しても完全なる主権を持っておられます。死は人生の終わりではなく、最後の結論を下すものでもありません。死は私たちの最終的な行き先ではありません。むしろ、死は私たちが本当の最終目的地へ向かうための“乗り換えの空港”にすぎないのです。
2. 病と死は、破壊と堕落の中にあるこの世界の一部です。病は、神との霊的な歩みに関わらず、誰に対しても容赦なく訪れます。しかし、それによって神のあなたへの愛が減ることは決してありません。病は堕落の結果としてこの世界に入りました。しかし、神の絶対的な主権のもとで、私たちの人生に対して確かな目的を持って存在します。
3. 私たちの復活は、その性質において“永遠に朽ちない不死の命”です。D.A.カーソンが述べるように、ラザロの復活が“死すべき命の回復”であったのに対し、私たちの復活は命がもはや死に服することのない、永遠の命なのです。ラザロの復活は、あくまで“死すべき者の命の回復”でした。彼は再び死を迎えました。もし彼がその後死ななかったなら、今日まで生き続ける世界最高齢の人物となり、世界中の主要メディアが彼を取材していたことでしょう。世界の著名な医学機関は、彼を調査し続けていたに違いありません。人々は彼をあがめ、まるで崇拝するかのように扱ったことでしょう。諸教会は、礼拝や交わりの集会に彼を招き、語ってもらおうと競っていたはずです。
4. 私たちの信仰が向かうべき究極の対象は、神の栄光です。生きるにも、死ぬにも、神の栄光を第一とするべきです。私たちの苦難は永遠ではなく、一時的なものです。その終わりが必ずあると知っているゆえに、苦しみのただ中でも、希望と勇気をもって日々を歩むことができます。
5. イエスは私たちの痛みと嘆きを深くご存じです。主は私たちと共に涙を流し、悲しみの道を共に歩んでくださいます。これは、他の宗教のいわゆる神々には見られない、イエスに固有の特質です。イエスは、私たちが喜びの時にも悲しみの時にも抱く思いを、余すところなくご存じです。他の宗教の神々は、聞くことも語ることもできず、まして私たちの感情を理解することはできません。涙は弱さではなく、へりくだった柔和のしるしです。人として来られた主は、感情を持つ私たち人間と深く同一化してくださいます。

6. イエスは、私たちがどれほど罪深くても、私たちの人生を変えることがおできになります。イエスが復活であり、命であられるゆえに、私たちに新しい命、新しい始まり、新しい目的、そして新しい希望を与えることがおできになります。私たちの悪がどれほど深くても、イエスは「あなたは生きる。決して死ぬことはない」と約束してくださいます。

まとめ

時は1918年、場所は東京でした。その年、その地で、残忍な殺人者として知られていた一人の男が罪により絞首刑に処されました。彼は男も女も子どもも、容赦なく殺してきた人物でした。彼が獄中にいたとき、カナダ人の女性宣教師であるウェスト嬢とマクドナルド嬢が彼を訪ね、鉄格子越しに話しかけようとしました。彼はまるで檻に入れられた獣のように、怒りの目で彼女たちをにらみつけるだけでした。話をすることができなかったので、二人は彼が読むことを願いながら、聖書を差し出しました。彼は聖書を開くと、読み進める手を止めることができず、イエスの十字架刑の物語に至るまで読み続けました。イエスの祈り―「父よ、彼らをお赦しください。彼らは自分が何をしているのか分からないのです」その言葉が、彼の心を打ち砕きました。彼はこう言いました。「読むのを止める。五インチの釘で胸を突き刺されたように、心臓を貫かれた。これをキリストの愛と呼ぶべきなのか。それとも、主のあわれみと呼ぶべきなのか。何と呼べばよいのか分からない。ただ、信じたということだけは分かった。そして、固く閉ざされていた私の心は変えられた」

その後、彼が絞首台へと歩いていったとき、もはや以前のような冷たく固い心の持ち主ではありませんでした。彼は自分の死を「神の公平で偏りのない裁き」として受け入れました。彼の心はイエスによって柔らかくされ、造り変えられました。彼は新しく生まれたのです。罪の中で死んでいた彼は、「復活と命」であるイエスによって生かされました。彼は死を恐れることなく、永遠への希望を抱いて死に向き合いました。その名は石井十吉です。(ウィリアム・バークレイ著『The Gospel of John』Vol. 2. 94頁;『The Conversion and Execution of Tokichi Ishii』(ジョン・パイパー; 2016年)、www.crossway.org)

イエスは言われた。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ11:25-26)

あなたの物語は、石井さんほど劇的ではないかもしれません。しかし今日、あなたは古い心から新しい心へ、固い心から柔らかい心へと変えられることを、切実に必要としているのではないでしょうか。今日、あなたはイエスだけが与えることのできる新しい命を、切実に必要としているのではありませんか。ならば、イエスを信じて受け入れましょう。

指定のない限り聖書は協会共同訳を使用しています。
聖書　協会共同訳: ©日本聖書協会
Japan Bible Society, Tokyo 2018

キリストのことをもっと知りたい
洗礼を受けたいという方はこちら
メール:cc@tokyobaptist.org
もしくは:https://t-b-c.us/cc

TBC Life 申込み
(毎週届くメールニュース)
http://t-b-c.us/tbclife

スモールグループ参加申込み

http://t-b-c.us/sgsu

オンライン献金

http://t-b-c.us/give

SG レッスンの PDF

https://gotbc.org/sg2726jp

TBC カレンダー
(TBC のスケジュールが確認できます)
https://tokyobaptist.org/calendar

★クラス 101
教会員になるためのクラス
9月6日(日)1:00 pm ～ 5:00 pm
場所: ランゲホール(B1)
参加条件: どなたでも

★クラス 201
クリスチャンとして成長するために
9月20(日)1:00pm – 5:00pm
場所: ランゲホール(B1)
参加条件: クラス 101 を修了したメンバーの方

全クラス申し込み:
https://t-b-c.us/classes